

間質性肺炎の早期発見のポイント

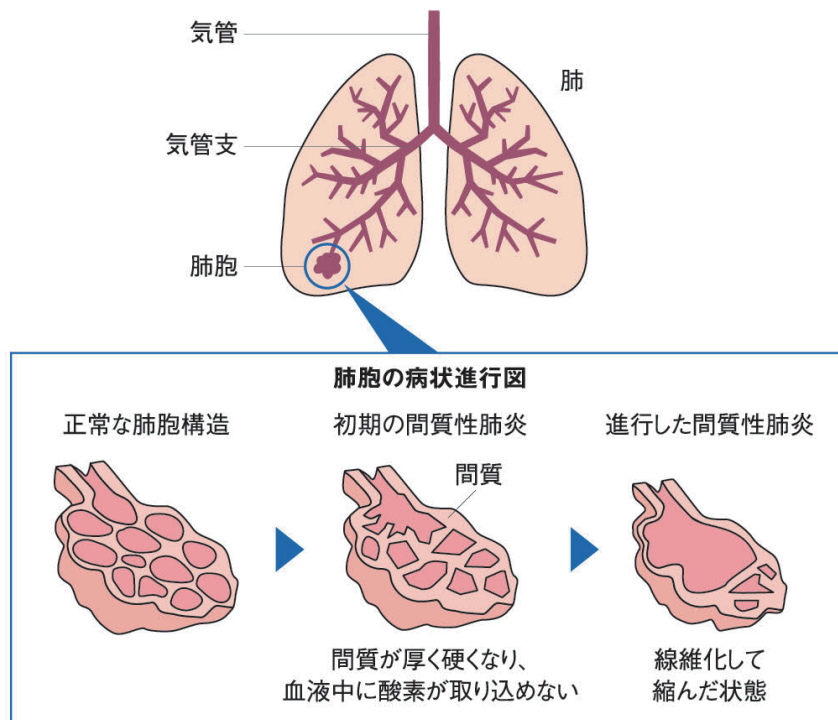
関西医科大学 呼吸器腫瘍内科学講座
主任教授

倉田 宝保 先生



がん治療で起こる間質性肺炎とは

肺の中には気管支の先に肺泡という空気の入った小さな袋があり、この肺泡を取り囲む組織を間質とよびます。間質性肺炎は、この間質が厚く硬くなり、うまく酸素を取り込むことができなくなった状態のことで、進行すると肺全体の機能が落ちて、血液中の酸素が不足し、呼吸不全に至ります。間質性肺炎はさまざまな原因によって肺泡の壁が炎症したり損傷して起こりますが、がんの治療でも起こることがあります。



ドセタキセルやブレオマイシンのような従来から使用されている殺細胞性抗がん剤、ゲフィチニブやボルテゾミブなどの分子標的薬、ニボルマブやペムブロリズマブなどのがん免疫治療薬など多くの抗がん剤で副作用として間質性肺炎を起こす可能性があります。抗がん剤投与開始から間質性肺炎が発症するまでの期間はさまざまですが、多くは投与開始後2~3週間から、2~3ヶ月後に発症します。

これらの薬剤による治療を受けていても、かならず間質性肺炎になるわけではありません。また、抗がん剤以外にも市販薬や健康食品が原因で間質性肺炎が起こることもあります。主治医に間質性肺炎のリスクについて、しっかりと確認するようにしましょう。

間質性肺炎の早期発見のポイント

関西医科大学 呼吸器腫瘍内科学講座
主任教授

倉田 宝保 先生



間質性肺炎に気づくためのポイント

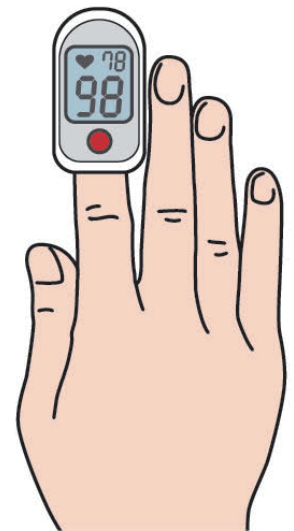
間質性肺炎は放置すると重症化するため、早期に気づくことと、少しでも疑いがあればすぐに医療機関に連絡をすることが重要です。間質性肺炎の代表的な症状として、「息切れ」、コホンコホンという「乾いた咳」、「発熱」などがあります。これらは風邪の症状とも似ているため、見逃してしまうこともあります。痰が絡むようなゴホンゴホンという咳ではなく乾いた咳が出る、少し歩いたり階段を上ると急に息切れがするようになった、ということがあれば、間質性肺炎の症状を疑います。

またパルスオキシメータ※が身近にあれば、その値も参考になります。酸素飽和度が普段よりも落ちていれば、自覚症状がなくても医療機関に連絡を取りましょう。

※パルスオキシメータ：

皮膚を通して動脈血酸素飽和度（SpO₂）と脈拍数を測定する装置。

一般的に96～99%が標準値とされ、90%以下の場合には十分な酸素を全身に送れなくなっている可能性がある。



間質性肺炎の治療と退院後の生活

抗がん剤の副作用として間質性肺炎が起こった場合は、原則として抗がん剤を中止し、入院のうえ治療を行います。一般的に治療には副腎皮質ホルモンの1つであるステロイド薬を用います。入院中に使用していたステロイド薬は、退院後も量を減らしながら継続しますが、この時期に再び間質性肺炎を発症することもあります。息切れや咳がまた悪化したと感じたら、すぐに医療機関に連絡するようにしましょう。

ステロイド薬服用中は免疫機能が落ちるため、細菌やウイルスに感染しやすくなります。手洗いやうがいなど、感染対策をしっかりと行うようにしましょう。

また、血糖値が上がって糖尿病が悪化したり、食欲が増加して食べすぎてしまうことがあるので、規則正しい食生活と、できる範囲で軽い運動を心がけるようにしましょう。